

生育歴が女子学生の体力格差に及ぼす影響の検討

A Study of the Influence of Each Stage in Life on the Difference of Physical Ability in Female Student

長野 孝男
山田 文男*

I 緒 言

近年、わが国の平均寿命は驚異的な伸びを示し、男女とも世界一のレベルに達している。例えば、1935年の平均寿命は男子で46.92歳、女子で49.65歳といずれも40歳代であったものが、36年後の1971年には男女共70歳を越え（男子70.17歳、女子75.58歳）、1992年には76.09歳、82.22歳となった。人生80年代に突入し平均寿命は今後ものびていくものと思われる。¹⁾

こうした平均寿命が著しく伸びた背景には次のような要因があげられる。第一に、わが国の気候や風土が長寿に適していること、第二に、食料事情が昔に比して好転したこと、第三に、生活環境や衛生環境、医療環境等が改善されたこと等があげられよう。いずれにしても、こうした平均寿命の著しい伸びは、高齢者社会に突入したことを示し、新たな問題をもたらしている。

労働の生産性が向上されるとともに新たな合理化や省力化が生まれ、人間は平均余命を伸ばす中で、余暇を各自のライフスタイルに合致した取り組みへと改善・順応しなければならなくなった。労働や生活の近代化・合理化・省力化は余暇をどのように使い、どのように人生を豊かにしていくかという新たな課題を浮かび上がらせたのである。そうした課題の前に、私達人間は、未だに困惑し解決できずにいる。生活様式の変化や交通手段の発達は私達に運動不足を生じさせ、半健康状態に陥らせている。まさにこういった状況が現代の私達の健康・体力の状態を写し出しているといえよう。

青少年の健康や体力・運動能力の状況も同様で、こうした社会状況を反映して一様に低下の傾向を示している。例えば、現代青少年の体力・運動能力は、毎年実施される文部省

*：本学非常勤講師

スポーツテストの結果が示すように、ここ数年低下傾向にある。²⁾ 93年度文部省小学校高学年の運動能力は、1964年以降の30年間で最低に落込み、体力では特に柔軟性が小学生、高校生で過去最低となった。³⁾ この間こうした青少年の体力・運動能力の低下傾向に関する指摘は多くの研究者によってなされてきたが、低下傾向に歯止めがかからずいっように改善されてこなかった。原因はいろいろ考えられる。もちろん社会状況の変化を第一に挙げるのが出来ようが、それと共に研究方法にも問題があったのではないか。それは青少年の体力を全体の平均値で観ているからであり、個々人の体力の状況や低下の原因を検討してこなかったからであると思われる。すなわち、体力上位群には上位群に属する要因があり、下位群には下位群に属する要因があろう。従って、個々人の体力を分析するにあたり、一人一人の生育歴を考察し、それらの関係を分析する必要がある。そうすることによって体力向上のための方策が考察される前提が生まれるといえる。

これまで筆者らは「体力」に関する研究を重ねてきた^{4) 5)} が、本研究では「体力」を多角的に分析しようとした。体力に関する多くの研究がなされてきた^{6) 7)} が生育歴と体力との関係を考察したものは見あたらない。集団の体力を云々しても青少年の体力はいっように改善されなかったことが示すように、個人の体力獲得過程の分析と考察なしにはこの問題は解決されないであろう。

本研究の目的は、青少年なかでも女子学生の体力格差を生む要因を検討するために、彼女らの生育歴と体力との関係を明らかにすることである。そして、体力格差と生育歴との関係が有意であるならば、各自の過去の経験や態度の相違によって体力に格差が現れるということであって、その生育歴を分析することによって、体力を向上させるための方策がある程度立つということであろう。こうして、将来の青少年の育成・指導に役立たせることができるものと思われる。

II 研究の方法

- 1 調査期間 1992年5月下旬より6月下旬までの期間
- 2 調査対象 本学女子一回生190名（有効回答率86.6%）
- 3 調査方法 体力診断テスト、皮脂厚測定、生育歴アンケート調査を実施
- 4 調査内容 体力診断テストは文部省青少年スポーツテストを実施した。測定種目は、反復横とび、垂直跳び、背筋力、握力、伏臥上体そらし、立位体前屈、踏台昇降運動の7種目および身長、体重、皮脂厚の測定を実施した。さらに、生育歴調査として、幼児期、児童期、中学・高校期、大学期の各時期における過ごし方を質問した。内容は次のとおりである。

- 幼児期：活発に遊びまわるほうだった
屋外の遊び場に恵まれていた
病弱なほうであった
- 児童期：体育の授業は好きだった
学校以外の組織的なスポーツ活動によく参加した
放課後は屋外の遊びのためによく外出した
スポーツや運動に対し熱心な先生にめぐりあった
- 中学・高校期：部活動や組織的なスポーツ活動によく参加した
体育やスポーツの経験は楽しいものであった
体力に恵まれていたほうである
スポーツについての影響を受ける先生や先輩にめぐりあった
- 大学期：授業以外に組織的なスポーツに参加している
私の親は継続的に運動やスポーツをしている
現在、私は体力がある方だと思う

記入にあたっては「あてはまる」「あてはまらない」のどちらかを評定をさせた。また、分析にあたっては各設問項目と体力とをクロスさせ考察した。

5 調査結果の集計

集計については SL-MICRO ソフトを使用した。また、分析にあたっては単純集計およびクロス集計を行い、カイ自乗検定で有意差をみた。

Ⅲ 結果と考察

1 本学女子学生の体格・体力の現状

体格・体力測定結果は Table.1 のとおりである。

Table.1 体格・体力測定結果

1992

	相愛大学 N=190		全国平均 N=595	
	M	S D	M	S D
身長 cm	158.51	5.10	158.11	4.92
体重 kg	52.24	6.72	51.19	5.70
皮脂厚 mm	42.75	13.58	—	—
上腕 mm	21.83	6.63	—	—
背部 mm	20.86	7.62	—	—
反復横とび回	38.86	3.63	38.63	4.47
垂直とび cm	43.44	5.38	42.49	5.96
背筋力 kg	82.27	18.07	83.31	18.62
握力 kg	28.11	4.16	28.17	4.76
上体そらし cm	56.63	8.46	57.00	7.06
立位体前屈 cm	12.93	5.87	13.78	5.70
踏台昇降運動	60.12	10.53	59.37	9.94
測定5段階評価	3.20	0.86	—	—

全国平均：全国体育連合報告書（1992）

体格・体力とも全国平均に比べ優れていることがわかる。

また、肥満の判定に必要な皮脂厚は、上腕背部と肩甲骨下部の合計により全国平均と比較してみた。今回の数値を皮下脂肪厚の判定基準表に照らし合わせると、成人女性の標準値であり、肥満傾向はみられなかった。

Table.2 皮下脂肪厚による肥満の判定基準

（皮脂厚=上腕部+背部）女子

年齢	軽度の肥満		中等度の肥満		高度の肥満	
	皮脂厚 mm	体脂肪 %	皮脂厚 mm	体脂肪 %	皮脂厚 mm	体脂肪 %
15~18	40	30	50	35	55	40
成人	45	30	55	35	60	40

体力の診断と評価（大修館，1977）

1992年に肥満に関する意識調査を実施したが、その結果190人中91人（47.9%）が「自分は肥満である」と思っており、標準でありながらスリムになりたいという痩せ願望を強

く抱いていることが判った。およそ半数近くの学生が実際は肥満ではないにもかかわらず、肥えていると信じ強い痩せ願望をもっていることは問題であろう。今後、肥満についての正しい指導が必要であろう。

体力を論じるにあたって、体力そのものの概念を明確にしておく必要がある。体力 (Physical Fitness) とは広義には「人間活動の基礎をなす身体的・精神的能力」をいう。また、狭義には「人間活動の基礎となる身体的能力」をいう。⁸⁾ 一般的には「身体的・精神的能力」を指すが、体育における体力を論じる場合、測定可能な身体的能力の要素を総称しての「体力」をいい、今回も測定として可能な体力診断テストを用いることにした。体力の要素として、敏捷性、瞬発力、筋力、柔軟性、持久力等があげられる。

今回の測定結果 (平均) をみると、反復横とびは38.86回で評価は4、垂直とびは43.44回でその評価は4、背筋力は82.27kgで同じく3、握力は28.11kgで3、伏臥上体そらしは56.63cmで3、立位体前屈は12.93cmで3、踏台昇降運動は指数60.12で3であった。反復横とびと垂直とびが全国平均に比してやや優れており、体力の要素として敏捷性、瞬発力に優れていることがわかる。

今回の測定結果の体力評価分布 (Table. 3) をみると、「優れている (非常に優れている+優れている)」は63人で全体の33.1%、「普通」は96人で50.5%、「劣っている (やや劣っている+非常に劣っている)」は31人で16.4%という結果であった。

Table. 3 体力測定結果の評価分布

段階	判定	N	%
A	非常に優れている	12	6.3
B	優れている	51	26.8
C	ふつう	96	50.5
D	劣っている	25	13.2
E	非常に劣っている	6	3.2

2 女子学生の体力と生育歴との関係

体力と生育歴との関係を考察するにあたり、体力の評価を「優れている=上位群」「普通=中位群」「劣っている=下位群」の3群に分け考察した。

①幼児期のライフスタイルと体力との関係

1 「幼児期には活発に遊びまわるほうだった」

結果を Table. 4-1 に示した。

生育歴が女子学生の体力格差に及ぼす影響の検討

Table. 4-1 「幼児期には活発に遊びまわるほうだった」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	10	32.3	21	67.7	31
中位群	24	25.3	69	72.7	93
上位群	10	15.9	53	84.1	63
合 計	44	23.3	143	75.7	187

$\chi^2=6.633$ DF=2 P<.05*

体力上位群は幼児期に活発に遊びまわり、下位群はあまり遊びまわっていないかった。

自己の幼児期の回想で23.3%の者が「活発に遊んでいなかった」としていることに注目する必要がある。幼児期の運動遊びは将来の体力に多大な影響を及ぼす⁹⁾ことから、体力の有無で人生が大きく影響されることを想定すると、幼児期の活動的な運動遊びの重要性を指摘しておかなければならないだろう。

2 「幼児期には屋外の遊び場に恵まれていた」

結果を Table. 4-2 に示した。

Table. 4-2 「幼児期には屋外の遊び場に恵まれていた」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	8	25.8	23	74.2	31
中位群	14	14.9	79	84.1	93
上位群	6	9.5	57	90.5	63
合 計	28	14.9	159	84.6	187

$\chi^2=8.158$ DF=2 P<.05*

体力上位群は屋外の遊び場に恵まれ、下位群はあまり恵まれていなかった。体力上位群は90.5%が、下位群は74.2%が「恵まれていた」と答えた。また、下位群の25.8%は「恵まれていなかった」と答えた。このように、屋外の遊び場という環境が将来の体力に影響を及ぼしていることをみれば、幼児期の屋外遊びの重要性とその環境である遊び場所の確保が指摘されよう。現在の都市空間における遊び場の減少は青少年の体力獲得過程と深く関係しているといえよう。

3 「幼児期は病弱なほうであった」

結果を Table. 4-3 に示した。

Table. 4-3 「幼児期は病弱なほうであった」

	あてはまらない		あてはまる		合計
	N	%	N	%	
下位群	24	77.4	7	22.6	31
中位群	84	90.3	9	9.7	93
上位群	44	72.1	17	27.9	61
合計	152	82.2	33	17.8	185

$\chi^2=8.889$ DF=2 P<.05*

全体の17.8%が「自分は病弱であった」とする中で、体力上位群の27.9%、下位群の22.6%がそれぞれ「病弱であった」とした。上位群の割合が下位群のそれより高かったのをどのように理解すればよいのであろう。病弱であったために親や本人の努力がなされた結果なのであろうか。今後の課題としてさらに追求する必要がある。

幼児期のライフスタイルは、以降の体力に大きな影響を及ぼすことが明らかとなった。特にこの時期の運動遊びの大切さと遊び場の確保は重要な意味を持つことがわかる。

②児童期のライフスタイルと体力との関係

1 「体育の授業は好きだった」

結果を Table. 5-1 に示した。

Table. 5-1 「体育の授業は好きだった」

	あてはまらない		あてはまる		合計
	N	%	N	%	
下位群	17	54.8	14	45.2	31
中位群	32	33.7	63	66.3	95
上位群	16	25.8	46	74.2	62
合計	65	34.6	123	65.4	188

$\chi^2=7.768$ DF=2 P<.05*

児童期に体育が好きであったものは全体の65.4%であった。表より体力上位群は体育が好きな割合が高く、下位群は低い傾向がうかがえた。特に下位群の過半数(54.8%)は「あ

てはまらない」としていたことから、小学校体育における授業のあり方の再考と教材研究の開発が望まれる。加齢と共に体育嫌いが増加する傾向にある¹⁰⁾と言われることから、児童期の体育のあり方が問われよう。体力・運動能力の有無がすぐに評価に結び付いたり、体力・運動能力の高いものだけが優遇されたりすると子供は体育嫌いに陥りやすい。その結果将来の体力に影響を及ぼすとすれば、この時期の体育は重要な意味をもってくる。落ちこぼれをつくらない木目の細かい指導が望まれよう。

2 「学校以外の組織的なスポーツ活動によく参加した」

結果を Table. 5-2 に示した。

Table. 5-2 「学校以外の組織的なスポーツ活動によく参加した」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	22	71.0	9	29.0	31
中位群	44	46.3	51	53.7	95
上位群	28	44.4	34	54.8	62
合 計	94	50.0	94	50.0	188

$$\chi^2 = 6.548 \quad DF = 2 \quad P < .05^*$$

体力上位群は組織的なスポーツ活動によく参加しており、下位群はしていない傾向が認められた。特に下位群の71.0%は「あてはまらない」とした。近年、遊び三間（空間・時間・仲間）が減少する傾向の中で、子供達は組織的なスポーツ活動以外に体力を獲得する機会がない。体力のある子供はスポーツ少年団や競技スポーツを目指すクラブに加入し、体力のない子供は最初から参加しないか親から指示されて教室的要素の強い組織（例えばスイミングスクール等）に強制加入させられる。もちろんそこにも競争原理が働いており、体力の弱い子供はドロップアウトさせられるという図式であろう。今後ますますこの傾向は強まることが予想されるだけに、運動の苦手な子供や体力の低い子供達も気軽に参加できるスポーツ組織が必要であろう。

3 「放課後は屋外の遊びのためによく外出した」

結果を Table.5-3 に示した。

Table.5-3 「放課後は屋外の遊びのためによく外出した」

	あてはまらない		あてはまる		合計
	N	%	N	%	
下位群	12	38.7	19	61.3	31
中位群	18	19.1	76	80.9	94
上位群	15	23.8	48	76.2	63
合計	45	23.9	143	76.1	188

$\chi^2=4.8999$ DF=2 N.S

中・上位群は「あてはまる」割合が下位群に比べ少し高くなっている。児童期の子供は放課後屋外遊びを好む傾向が強く、全体の76.1%が「あてはまる」とした。検定結果に有意差は認められなかった。このことは断定はできないが、児童期を低学年・中学年・高学年として発達段階別にとらえず、一括して児童期全般として設問したことで曖昧なものとなったものと思われる。

4 「スポーツや運動に対し熱心な先生にめぐりあった」

結果を Table.5-4 に示した。

Table.5-4 「スポーツや運動に対し熱心な先生にめぐりあった」

	あてはまらない		あてはまる		合計
	N	%	N	%	
下位群	22	71.0	9	29.0	31
中位群	49	52.7	44	47.3	93
上位群	32	50.8	31	49.2	63
合計	103	55.1	84	44.9	187

$\chi^2=3.850$ DF=2 N.S

検定結果有意差は認められなかったが、上位群は「あてはまる」とした割合が高く、下位群は「あてはまらない」とした割合が高いという傾向がみられた。この時期の子供はスポーツの動機づけとして、指導者や先生との出会いが重要であるといわれる。¹¹⁾

このように、体力上位群は体育が好きな割合が高く、組織的なスポーツ活動によく参加

生育歴が女子学生の体力格差に及ぼす影響の検討

し、よく遊び、スポーツの動機づけとして多大な影響を与える先生や指導者に出会っていた。反対に下位群は、体育が嫌いでスポーツ活動には参加せず、屋外遊びを好まない傾向を示した。

③中学・高校期のライフスタイルと体力との関係

1 「部活動や組織的なスポーツ活動によく参加した」

結果を Table. 6-1 に示した。

Table. 6-1 「部活動や組織的なスポーツ活動によく参加した」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	19	61.3	12	38.7	31
中位群	37	39.4	57	60.6	94
上位群	15	23.8	48	76.2	63
合 計	71	37.8	117	62.2	188

$$\chi^2 = 12.622 \quad DF = 2 \quad P < .01^{**}$$

体力上位群は「あてはまる」とした割合が高く、下位群は「あてはまらない」とした割合が高かった。体力の高いものがクラブ活動やスポーツ活動に参加したとも考えられるが、おそらく参加した結果体力が高まったと考える方が妥当だろう。参加・加入にあたっては児童期の運動経験や体力獲得の状況がその後の意識に影響を及ぼし、活動に参加できたのであろうと思われる。いずれにしても、幼児期、児童期、中学校期、高校期へと一連のつながりの中で体力格差が広がり、そして学生の体力の現状へと移行するものと考えられる。

2 「体育やスポーツの経験は楽しいものであった」

結果を Table. 6-2 に示した。

Table. 6-2 「体育やスポーツの経験は楽しいものであった」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	22	71.0	9	29.0	31
中位群	25	26.6	69	73.4	94
上位群	17	27.4	45	72.6	62
合 計	64	34.2	123	65.8	187

$$\chi^2 = 22.297 \quad DF = 2 \quad P < .001^{***}$$

体力中・上位群は「あてはまる」とした割合が高く、下位群のそれは低かった。

体力上位群は体育授業は楽しいものであり、下位群にとっては苦痛の場でしかない。また、スポーツの場も同様で、能力主義が貫かれる場で上位群は優位であり、下位群は劣位でしかいられないであろう。よって、体育・スポーツ経験が「たのしい」ものであるのは上・中位群に限られよう。しかし、「たのしい」がゆえに活動に参加し、その結果体力が獲得されるという相乗作用を考慮すると、体育・スポーツのあり方の中身が問題で、技術的に劣位の者も体力の低い者も楽しくできる体育やスポーツが保証される場合、結果も変わってくるものと考えられる。したがって、いかにそれらを楽しく有意義なものにするかが課題であり、楽しくすることによって青少年の体力の状況も大きく変わってくるのではないと思われる。

3 「体力に恵まれていたほうである」

結果を Table. 6-3 に示した。

Table. 6-3 「体力に恵まれていたほうである」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	24	77.4	7	22.6	31
中位群	50	53.8	43	46.2	93
上位群	20	32.3	42	67.7	62
合 計	94	50.5	92	49.5	186

$$\chi^2=17.6364 \quad DF=2 \quad P<.001***$$

Table. 6-1、6-2 で考察したとおり、幼児期、児童期の一連の体力獲得過程の中で、中学・高校期の体力の現状が存在した。学生の段階で体力上位群は、中学・高校期の体力を「恵まれていたほうであった」と回顧している。これを如実に反映して、下位群の77.4%の者が「あてはまらない」とし、上位群の67.7%は「あてはまる」と回答していた。

4 「スポーツについての影響を受ける先生や先輩にめぐりあった」

結果を Table.6-4 に示した。

Table.6-4 「スポーツについての影響を受ける先生や先輩にめぐりあった」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	24	77.4	7	22.6	31
中位群	54	56.8	41	43.2	95
上位群	34	54.0	29	46.0	63
合 計	112	59.3	77	40.7	189

$\chi^2=5.20$ DF=2 N.S

検定結果に有意差は認められなかった。だが中・上位群の肯定的回答率は高く、下位群の否定的回答率は高い傾向が示された。従って中・上位群は先生や先輩からスポーツに関する影響を受けたことになり、そうした指導者の有無は学生の体力に多大に影響を及ぼしていると思われる。

以上のようにこの時期、体力上位群はクラブ活動に積極的に参加し、体育・スポーツを好意的に受け止め、体力に恵まれていたと回顧していた。反対に下位群はクラブ活動に参加することなく、体育・スポーツを苦痛なものとして捉え、体力に恵まれていなかったとした。自我の発達がめざましいこの時期は、将来の体力獲得状態を決定づける重要な時期と思われることから、体育・スポーツのあり方が問われよう。特に下位群も楽しめる授業や活動の再考が望まれる。

④大学期のライフスタイルと体力との関係

1 「授業以外に組織的なスポーツに参加している」

結果を Table.7-1 に示した。

Table.7-1 「授業以外に組織的なスポーツに参加している」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	25	80.0	6	19.4	31
中位群	59	63.4	34	36.6	93
上位群	37	58.7	26	41.3	63
合 計	121	64.7	66	35.3	187

$\chi^2=4.499$ DF=2 N.S

検定結果に有意差は認められなかったものの一定の傾向はみられよう。体力上位群は「あてはまる」とする割合が高く、下位群は「あてはまらない」とする割合が高かった。特に下位群の80.0%はスポーツ活動に参加しておらず、幼児期以降の体力獲得過程でドロップアウトされてきた結果、学生となった段階でスポーツから遠ざかる状況となっている。上位群の58.7%もの者が組織的スポーツ活動をしていないことは、現在の学生スポーツの状況を現している。中学・高校期のスポーツ活動における燃え尽き症候群と言われるように、競争原理に支配され、管理されすぎた中学・高校期におけるスポーツ活動（クラブ活動）の弊害から、大学ではクラブ活動や組織的活動を嫌う風潮があり、そうした反映として現れている。

2 「私の親は継続的に運動やスポーツをしている」

結果を Table. 7-2 に示した。

Table. 7-2 「私の親は継続的に運動やスポーツをしている」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	17	54.8	14	45.2	31
中位群	18	18.8	78	81.3	93
上位群	10	16.1	52	83.9	62
合 計	45	23.8	144	76.2	189

$$\chi^2=19.824 \quad DF=2 \quad P<.001***$$

体力上位群は「あてはまる」とする割合が高く、下位群は「あてはまらない」割合が高かった。すなわち、体力上位群の学生の親は現在スポーツをしており、下位群の親はしていないという結果であった。このように、親が子供の体力に与える影響は大きく、親のスポーツ実践が本人だけでなく子供の体力に重要な意味をもってくるのである。

3 「現在、私は体力がある方だと思う」

結果を Table.7-3 に示した。

Table.7-3 「現在、私は体力がある方だと思う」

	あてはまらない		あてはまる		合 計
	N	%	N	%	
下位群	25	80.6	6	19.4	31
中位群	54	59.3	37	40.7	91
上位群	27	42.9	36	57.2	63
合 計	106	57.3	79	42.7	185

$$\chi^2=12.431 \quad DF=2 \quad P<.001***$$

幼児期からこれまでの運動歴や生育歴の集大成として現在の体力の現状がある。そして学生は自己を主観的に判断して体力評価をした結果、「あるほうだ」「ないほうだ」と判断しているのであろう。

IV 総括および結論

学生の体力測定結果と生育歴との関係を考察した結果は次のように総括することができる。

①本学女子学生の体型は標準値の範囲にあり、全体として肥満傾向はみられなかった。だが、標準であるにもかかわらず「痩せ願望」が強く、適切な指導が望まれる。

②こうした体格の本学学生は、体力では反復横とび・垂直跳びで全国平均を上回り、敏捷性、瞬発力にやや優れていた。

③体力と生育歴との関係をみると、体力上位群は幼児期に屋外の遊び場に恵まれ、活発に遊びまわっていた。反対に下位群は屋外の遊び場に恵まれず、活発に遊んでいないことがわかった。

④児童期をみると、上位群は体育の授業が好きであり、学校以外の組織的なスポーツ活動に参加し、放課後は遊びのためによく外出していた。また、運動やスポーツに熱心な先生に恵まれ多大な影響を受けていた。一方、下位群は、体育の授業が嫌いで、校外の組織的なスポーツ活動に参加せず、遊びのために外出しない傾向がみられた。そして熱心な先生に恵まれていなかったとした。

⑤中学・高校期では体力上位群は部活動や組織的なスポーツ活動によく参加し、体育・スポーツ経験は「楽しいもの」であったとした。さらに、先生や先輩に恵まれ、スポーツ

についての影響を受け、自己評価として体力に恵まれていたとした。他方、下位群は、クラブ活動や地域や民間のスポーツ活動には参加せず、体育・スポーツ経験では「楽しさ」を味わっておらず、先生や先輩からも影響を受けていなかった。そして、体力には恵まれていなかったと訴えた。

⑥大学生になると、これまでの経験や体力獲得状況を反映して、上位群は積極的にスポーツ活動に関わり、スポーツを楽しんでいる様子であった。その反対に、下位群はあまりスポーツ活動に参加せず、スポーツから疎外されていた。また、体力上位群の親はスポーツに親しんでおり、親の影響が今日の学生の体力獲得過程に与える影響が多大なことがわかった。

幼児期以降の体力獲得過程を通して、学生は現在の自分の体力の有無を評価しており、これまでのライフスタイルと体力の関係が有意であることが明らかにされたといえよう。

以上から、学生の体力と生育歴との関係を分析した結果、幼児期の屋外遊びの場の確保と遊び内容は以後の体力に決定的な意味を持つものと考えられる。また、小学校期における体育授業の中身のあり方が大きく問われており、体力・運動能力の低い児童がたのしく参加できるよう配慮しなければならないだろう。特に教材の系統的・科学的な配置と教材研究の開発が今後の課題として浮かびあがる。さらには教師自身がそのことに気付き、人間的なあたたかさのある指導観、子供観を持つことが急務であると思われる。

青少年の体力は、幼児期より大学生に至る体育・スポーツをめぐる環境に大きな影響を受けているが、特に幼児期・児童期の遊びやスポーツが「楽しい」ものであることが重要な意味をもってくるといえよう。そして、中学・高校期にはそれまでの体力獲得の状態により行動や態度が決定されるといえよう。また、そうした評価や態度を決定づける要因として、親のスポーツに対する態度が大きなウエイトを占めていることがうかがえた。

今回の研究結果は、学生の体力と生育歴との関係は有意であり、体力上位群は体育・スポーツをポジティブに評価し、下位群はネガティブに評価する傾向を明らかにした。

文 献

- 1) 『国民衛生の動向』厚生省、1992
- 2) 『体力測定結果調査報告』第8号、(社)全国体育連合体力テスト委員会、1992
- 3) 『体力・運動能力調査報告書』文部省、1993
- 4) 長野孝男「スポーツに対する態度が学生のスポーツ学習効果に及ぼす影響」『相愛大学研究論集』第9巻、1992
- 5) 長野孝男、山田文男、神野稔「女子学生の体育・スポーツに対する意識構造の相違」『大阪体育学研究』No.28, 29, 4. 1991
- 6) 小野三嗣「今の子どもの体力の現状とこれからの学校体育の課題」『学校体育』10. 1986
- 7) 「子どもの体力問題を考える」『学校体育』10. 1986
- 8) 井上美佐男『健康生活の設計と体育』不昧堂出版、1990
- 9) 山田文男他「幼児の運動遊びと体力との関係」『大阪体育学研究』1987
- 10) 西順一「子どもの体育嫌い」『学校体育』1985
- 11) 高野清純他『幼児から青年までの心理学』1991